



不安定な子どもの段階的な関わり ～ 問題行動の未然防止 ～

前年度から問題行動を繰り返す子どもを引き継ぎました。新学期も不安定な行動が多く、目が離せません。注意をするべきか、話を聞いてやるべきか等、対応に迷います。



親は、3つの役割をしています。

- 1 受け止め、安心安全を感じさせる
 - 2 強く頼りになり、良い方に導く
 - 3 出発を見送り、見守り、報告を聞く
- 不安定な子どもへの関わりの順序です。



どの段階の関わりかを引き継ぐことも...

「1対1なら、落ち着いた関係です。
でもまだ集団では不安で、衝動的です」

「それなら 1対1の関係は早くつくれそうですね。その次の自制が課題ですね」

引き継ぎで情報を聞いていても、実際の対応に悩むことがありますね。昨年度も、さまざまな相談がありました。

- ・制止すると、衝動的に暴力を振るう。
 - ・がんばるように求めると、教室に入らなくなった。
 - ・言うとおりにしていると、要求が激しくなってきた。
 - ・常に一緒にいることを求め、離れると不安定になる。
- そんな不安定な子どもへの関わり方を考えます。

発達段階の抜け落ちを埋める

心理学者エリクソンは、生育時期ごとに発達課題を獲得しながらアイデンティティを形成することを研究しました。前の課題が獲得できていない子どもは、次の段階に行くことができません。

《 エリク・H・エリクソンによる発達段階 》

発達課題	重要な人間関係	必要な経験
(乳児期) 0～2歳 基本的な信頼・安心	母親的な人	望み通りに愛される 一体感を感じる
(幼児期) 2～4歳 自立性・感情の自制	複数の親切な人	根気よく教えてもらう
(児童期) 4～7歳 自発性・好奇心	基本的家族	自分で体験・探求をさせてもらう
(学童期) 7～12歳 勤勉性 (自発・習慣)	多くの友だち 近隣・学校	友だちから学ぶ・教える 友だちと経験を共有する

信頼や安心が獲得できていない子どもに、いきなり「がまんしなさい」と指導すると、不安感を高めて問題行動を起こします。逆に、信頼関係ができているのにいつまでも言いなりになって受け入れていると、かえって不安定になります。その子がどの段階まで満たされ、どの段階でつまづいているのかの判断が必要です。

問題行動が過激になると、安定に時間がかかります。一番良いのは、問題行動を起こすようになる前に、子どもの問題を解消することです。子どものつまづきを早く察知して、課題獲得を支援することが未然防止になると思います。

子どもが落ち着いた例を聞くと、状態に合わせて段階的な関わり方をしています。子どもが安定するまでの対応を裏面に整理しますので、参考にしてください。

強い不安や怒りは、暴力行為を起こします。暴力を許してはいけません。怪我をするのも、させるのもだめです。人を傷つけると、子どもの心も傷つきます。



子どもも先生も怪我をしないホールドの仕方を研究して、対応しておられました。

- ・頭突きされないように頬をつける。
- ・両脇から手を入れて手首を押さえる。



イライラや怒りの感情が出てくることが、ダメなこととは教えません。怒りに振り回されずに、コントロールすることを学びます。



学年や校種で引き継ぎながら、安心して自立できるように関わり、人への信頼を言葉にして卒業していった子どもたちがいます。

段階的な関わりのポイント

(1) まず安心できる関係をつくる

安心の気持ちが育っていない子どもは、キーパーソンと1対1で安心関係をつくるのが土台になります。この土台がないと、次の段階に進めません。自分を守るために、強がる・認めない・引きこもる等の行動が多いですが、できないことも含めて受け入れていることを伝えます。無条件で受容されていると子どもが感じるのが大事で、「これができれば良い子」などの条件付けはダメです。悪い行為は注意をしますが、注意した時も「あなた自身は大事だ、大好きだ」というフォローをします。

(2) 謝罪を目的にすると、うまくいかない

安心を獲得できていない段階なら、自分を守る緊張状態で生活をしています。弱みを見せることは自分の生存が脅かされると感じるので、「ありがとう」「ごめんなさい」が言えません。負けや過ちを認められないことが、集団に入れない原因や攻撃的な言動になります。失敗しても大丈夫だと思える自己肯定や安心感がが必要です。

(3) 範囲や選択肢を示し、自己選択と自己決定

安心の関係ができると、次は、うまく先導してやるのが子どもの不安を除きます。子どもの力や心情を測りながら、やってもよいことの範囲を示してやります。先生が示す範囲の中で、子ども自身が選択し自分で決定することが大事です。キーパーソンが関われない時間があれば、その時の行動を選択することも必要です。

(4) 暴れた時は、感情を受け止め、暴力は止める

衝動的に暴れた時は、感情を受け止めてやることと、壁になって暴力を止めてやることの両方が必要です。どちらか片方だけではうまくいきません。「離せ」と暴れる子どもに、「先生は〇〇さんのことが大事だから、離さないよ。腹が立ったんだね。でも、危ないから離さない。」と抱きかかえて落ち着かせた先生がおられました。

(5) 役割を与える・感謝される経験を持たせる

キーパーソンとの安心関係を土台に、子どもは集団での居場所を探り始めます。役割やルールを決めてやったり、他の人に感謝される活動と一緒にしてやったりします。「ありがとう」の言葉をシャワーのように子どもに浴びせたいです。「喜んでくれるかな」と言いながら活動することもあります。

(6) 基地の役割をして、他の人に繋げる

自立や自主性を感じる行動が見られるようになると、キーパーソンは基地になり、子どもを送り出すようになります。活動後に迎えて報告を聞くことも大事です。離れて見守る先生にアイコンタクトをしてからグループ活動に向かう子どもの姿が見られるようになります。